

贈答歌と会話と段落構成から見た『篁物語』という『つくり歌物語』の創出

安部清哉

1 はじめに——歌と会話とがつなぐ「作り歌物語」——

『篁物語』は、平安文学作品としては小品であることもあって、従来、文学史的にも（また、語彙量が少ないので日本語史的にも）、あまり重要視されてこなかった。

しかし、その文章構成を、後述のように、改めてその諸特徴から捉えなおしていくと、特に、文学史的に、また、文章・文体史的に、『伊勢物語』ほかの「歌物語」と『源氏物語』との間に成立年代が位置することが（その語彙・語法や原作者説によって）明らかになってきた。そのこともあって、平安期の文学史、ひいては日本の文学史の中でも、重要な位置にあるのではないか、ということが改めて見えてくるように思われる。

本稿は、そのことを考証していくための一階梯として、『篁物語』の文章を、どのように読み取るのがより作者の創作意図に適っているかを考えてみたい。作品本文を場面や段落ごとに実際に区分して（いわゆる章段に区分する形

式で）分析することによって、よりふさわしい作品解釈を検討することを目的とする。

本稿6節に、試みに、『伊勢物語』等のいわゆる「歌物語」にならない、章段にわけた『篁物語』を解釈の一方法として提示してみる。そこで示したような章段分けをして読み取るだけでも、『篁物語』が、和歌を含んだ独立性の高い複数の「歌物語」的章段部分と、会話・対話によって「つくり物語」的内容を展開させているいわゆる創作的な説話的部分とに分けられること、そしてそれらをつなぎつつ融合させることによって、いわば「つくり歌物語」とでも呼べるような物語文章の創出を試みていることが、読み取れるように思われる。なお、本稿では、章段区分の基準の細部の解説は、一部を除き後日の別稿に委ね、まずは実際の作品の章段解釈の提示を優先させることにした。

2 『篁物語』の和歌と場面構成ほかの章段構成からみた文章

近年の『篁物語』研究においては、以前は未詳だった成立年代にも一定の定説が認められるようになり（少なくともいわゆる前半の第1部に関しては平安前期、10世紀後半期で定説化していると言えよう）、また、原作者説についてもより具体的な論証で一案が提示されるようになった（源順原作説、安部（2017.3））。

また、『篁物語』の典拠になっているらしい漢籍や本邦の文字作品が、かつてよりも数多く指摘されるようになってきている。『篁物語』の典拠の一つとして、かつての『伊勢物語』典拠説が発掘されて検証され、それに連動して『伊勢物語』と関係する段落（場面）の配置が検討された。また、主人公への呼称「せうと」と「男」の相補的分布と段落（場面）の配列およびそれらの典拠作品との関係などが、相互に複雑に関連性を持つことも、指摘されるようになった。つまり、それらによっても、段落・場面相互の位置関係が従来より、より詳しくとらえられるようになった。

た(以上、安部(2018.3, 2018.5, 2019.3)参照)。

一方で、『篁物語』が、歌物語的部分と説話文学的部分から構成されているという見方は、古くからなされ、一定の定説となっている(例えば、菊田茂男(1955)や岩清水尚(1955)ほか)。また、『篁物語』の少なくともその一部は、登場する男女の贈答歌を場面構成の中心に据えつつ展開していることは、すでに広く指摘されてきている(例えば、近年のものでは三浦則子(2000))。それらからは、すなわち、歌を中心とした歌物語的章段(ないし場面)、および、歌が無(い或少な)くて会話や地の文が中心の説話的章段(ないし場面)があり、それらが、(場面や段落によって)組み合わされた文章スタイルを取っている、ということになる。

これまでのこれらの指摘を踏まえると、贈答歌などの和歌中心の部分、説話的な部分、典拠がある部分などについて、従来からも指摘されている語彙・表現・文体・文法などの偏りに関する観点も取り入れて、相互に諸特徴を勘案しながら、『篁物語』の段落・場面の構成のされ方を、新たに再検討していく余地があることが見えてくる。

本稿では、先行の考察や指摘を参考に、上記のような問題意識をもって、『篁物語』の物語文章の章段構成について検討してみることにはしたい。

3 『篁物語』の文章構成の諸相

後掲の6節に、『篁物語』の文章について、現段階での試みとしての章段構成を提示してみた。

いわゆる前半・後半ないし第1部・第2部とも呼ばれてきた2部構成を踏襲し(本稿では、第1部、第2部と表記する)、また、菊田(1964)などにおける、第1部を5段、第2部を3段とする構成も踏襲しつつ、さらにその下位

区分を次のように23段まで立てた。

■部——2部構成（第I部・第II部）

◆章——8章構成（第I部内は第1章～第5章の5章構成、第II部内は第6章～第8章の3章構成）

○段——23段構成（各章内をさらに下位に細分して次のように、23段とした）

第1章||4段、第2章||5段、第3章||2段、第4章||4段、第5章||1段

第6章||3段、第7章||2段、第8章||2段

この下位区分の段の設定の大きな目安としては、まずは、次の2つの観点での相違が重視された。

(1) 贈答歌（単独歌の場合もあるが、3首・5首による場合も含む）を物語の個々の一場面の結び（終り）部分に据えて構成されている場面（段落）

(2) 会話・発話を中心として展開されている場面（段落）、ないし、説話の展開部（例えば、冒頭部や終結部、また、場面転換部）など、いわゆる「地の文」を中心にして記述されている部分

この2点によって文章が大きく異なっていることが見てとれる。それらは外形上・表面上（和歌、会話、地の文など見た目での区別）でも把握される特徴でもあるが、実質的には、物語の場面など内容と極めてよく連動しているものであった。

また、段のうち、(1)の特に和歌・贈答歌がある章段は、いわゆる「歌物語」（『伊勢物語』他）における歌を中心として構成された文章とほとんど類似ないし近似するということができるものであり、「歌物語」的段落と見るこ

とができる（もちろん物語として前後と連続する段もあるが、独立して読める部分や、例えば、登場人物を「男」や「女」などに置き換えるとはほとんど独立したものとしても読み得るような部分も多い）。

なお、大区分における二部構成、および、中位区分における8分類までは、この「2部—8章」分類を取る先行研究の立場とはほぼ同じである（大区分を3部立てとする論（例えば、山口博（1997）など）もあるが、他説などの紹介は機会を改める）。

段とした下位区分は、これまでの拙稿での分析（特に、安部の二〇一八年における3論文）を踏まえ、さらに下記のような観点からの考察を踏まえている。その下位区分の基準とさらに詳しい個別部分の具体的解説は、別稿で補って解説していく予定である。

◆下位区分において重視した諸観点

- 和歌（贈答歌）の関連と配置（三浦則子2000ほか）
- 会話・発話の連続（会話中心での展開等としていくつかの先行研究が指摘）
- 語彙・語法の時代的新旧（安部1996）
- 係り助詞（安部2018.6にて先行研究も紹介）
- 人物呼称（安部2018.5、安部2019予定稿、先行研究でも注目）
- 接続詞・接続助詞・接続表現（複数の先行研究が指摘）
- 指示代名詞（いくつかの先行研究が指摘。「例の」等も含む）
- 時節・日時等の明記（安部2018.5）
- 会話直前の話者提示形式

○典拠（出典、依拠等）の作品の有無（安部 2018.5）

○主題関連語彙の有無（安部 2018.5）

○同一語句・類似表現等の繰り返しとその位置（安部 2018.5・安部 2019.3 予定稿）、ほか

4 章段構成の把握から見えてくるもの

本稿のような章段構成の分析的考察が、物語文章の考察にどのようなメリットがあるか。そのことを併せて提示できなければ、作品が読みやすくなる、という以上の意義はない。どのような点が、新たな解釈につながり、原作者が意図した創作の意図に近づける「解釈」になり得るか、が問題である。より詳しい考察は別稿を予定しているが、ここでは、その一部を、以下に示しておくことにしたい。

興味深いことに、特に贈答歌で場面の終りが結ばれている章段は、『伊勢物語』や『平中物語』などのように、あたかも一つの「歌物語」の章段のように、そこだけで完結した一話のように（も）創作されているらしいことが見えてくる。

なお、この節では、本稿末尾に掲載した『篁物語』本文から1章段毎に引用して例示していくが、あくまで理解の便のため、(一)の語句を付記しておいた。(一)内の語句が無くとも平安作品としては、無理なく理解可能であろう。【】は『篁物語』の内容の確認のために、参考までに注記してある部分である。贈答歌の傍線や太字等の注記については6節参照。

まず、本稿における章段分けで、「三段」（第1部第三章）とした「師走の月夜」の場面を挙げる。

○ 三段 (「師走の月夜」 贈答2首)

師走のもちごろ、月いとあかき(一女と)物語しけるを、人見て、

「誰ぞ。あな、すさまじ。師走の月夜ともあるかな」

と言ひければ、(男)

《和歌》【篁】春を待つ冬のかぎりと思ふにはかの月しもぞあはれなりける
返し、(女)

《和歌》【妹】年をへて思ふもあかじこの月ほみそかの人やあはれと思はむ 【かつての一説…詠み手「人」】
かく言ふ程に、夜ふけにければ、

【妹】「人うたて見んもの」
とて、入りにけり。

男は、曹司にとみにも入らで、うそぶきありきけり。

あたかも、「歌物語」の独立した一つの段落であるかのような構成である。

独立性が高いとは言っても、実際には物語の中にある場面であるから、若干のつながりの表現は避けがたい場合もある。次に挙げる段では、その冒頭のつながりの表現を見せ消し線で消して提示してみた。

○ 四段 「せうとの懸想」 贈答 3首

さて、あしたは、「男」久しく書読ませざりければ、

父ぬし、「あやしく篁が見えぬかな」【父主】

と言ひて、呼びにやるに、男来て、れいの、書かき集めて「女に」教へけるまゝになん、この女のみ心に入りて、ひがごとをのみなむ、しける。かう教ふる中に、かくひち【角筆】して、「男」

《消息》【篁】「かやう、初の書は、ひがごとつかうまつるらん。このごろは、物覚えずぞや。

《和歌》【篁】君をのみ思ふ心は忘れられず契しこともまどふ心か返し、「女」

《和歌》【妹】博士とはいかゞ頼まむ人知れずもの忘れする人の心を

又、男、

《和歌》【男】読み聞きてよろづの書は忘るとも君ひとりをば思ひもたらん

かくて、この男は、てふくみ【手文？】をぞ、常に作りかへける。

冒頭の、「さて」程度の接続詞は他の歌物語でも見られるから、前の章段からの時間系列を示す「あした」（翌朝、ないし、ある日）がついている程度の問題となる。

和歌、特に、贈答歌を含む章段は、あたかも一つの独立した「歌物語」風に、場面の終りの方を歌のやり取り（贈答）で締めくくるように創作されていることがわかる。

そのことは、次の十段もほぼ同様である。主語に「親」が明示されているから、あとは「女に・娘に」ということが補われているならば、さらに場面は独立していてもほどほどに理解されやすかるう。

○ 十段 「兄・妹心通ひ」 贈答 3首

れいの書読みは、『内侍になさん』の心ありて、親は【娘に】書教ふるなりけり。文かよはしにはしゝたれど、この（女の）兄、心をまどはして、思ひ出でられけり。男（兄）、言ふやう、

【篁】「かく思ひ出でられ、かぎりなき心を思知らずして、よそなる人を思ひたまへるこそ、つらけれ。」

《和歌》【篁】目に近く見るかいもなく思ふとも心をほかにやらばつらしな
と言ひければ、（女）

【妹】「人の御心も知らずや。」

《和歌》【妹】あはれとは君ばかりをぞ思ふらんやるかたもなき心とを
思ひくさなや

と言ひければ、すこし心ゆきて、（男）兄

《和歌》【篁】いとゞしく君が嘆きのこがるればやらぬ思ひも燃えまさりけり

かく言ひて、心はかよひけれど、親にもつゝみ、人にもさはりければ、心とけて久しくも語らはずあり。

これらのような特徴は、第I部前半だけでなく、その後半でも次の十五段のように同様に維持されているのが認められる。冒頭に「むかし、男、ありけり。」を入れて読んでみるとよりその独立性が理解しやすい。

○ 十五段（「妹の招魂と亡霊」） 贈答 2首

〔むかし、男、ありけり。〕その甲のようさり、火をほのかにかきあげて、泣き臥せり。あと【足元】あとのかた、そゝめきけり。火を消ちて見れば、そひ臥す心ちしけり。死にし妹の声にて、よろずの悲しきことを言ひて、泣く声も言ふとも、たゞそれなりければ、もろともに語らひて、泣くくさぐれば、手にもさはらず、手にもさはず。ふところにかき入れて、わが身のならんやうもせず、臥さまほしきことかぎりなし。

《和歌》【篁】泣き流す涙の上にありしにもさらぬあはの山かへる
女、返し、

《和歌》【妹】常に寄るしばしばかりは泡なればついに溶けなんことぞ悲しき
といふ程に、夜のあけにければ、なし。

これら第I部だけでなく、第II部で和歌がある次の章段でも、同様のことが指摘できる。

■ 第II部 ◆ 第七章

○ 二十段（「亡霊譚 続」） 和歌 1首

〔むかし、男、ありけり。〕さて、このさち、妹のありし屋にいきたりければ、いと悲しかりければ、寝にけり。妹、
《和歌》【妹】見し人にそれかあらぬかおぼつかかなもの忘れせじと思ひしものを
と言ひければ、かの殿にもいかにてぞ、泣きをりける。

「ありし」と過去でありながら歌を詠みかけてくる妹には、現代的理屈からは矛盾のある文とも言えるだろうが、「寝にけり」で場面は展開していることがわかる。古文の世界の中で言えば、既に「夢の中の妹」だと、理解される文にはなっていることになる。また、「かの殿」が直接は何かは未詳であろうが、例えこの段落が単独でも、自分の帰るべき屋敷、あるいは、妻が居て帰ることが期待されている「かの」屋敷であるという程度には推察することができる文と言えるのではないだろうか。

これらの特徴は、説話的部分であるとこれまで指摘されてきた「兵衛佐」が登場している第一部においても、贈答歌がある部分では、次のようにやはり同じ程度に認めることができる。そのことは、これまで第II部のように「説話的部分」と言われてきたこの兵衛佐登場の章段も、その前後と同一作者による文体であることを示唆していると言えようか。

○ 六段 「如月初午稻荷詣 2 (兵衛佐との和歌の贈答)」 贈答 2首

【**さる**程に、(昔、)兵衛佐ばかりの人、かたち清げにて年廿ばかりなりけるが、詣であひて、かへさに、女の道にゐたる、

【佐】「あな、くるし。かくてやは、出で立ち給へる」。

もの嫉みして、男申に、

【佐】「かしは車作りて、このわたりなる木さきの屏にすへ奉らん。女の身には大王、みかどには誰をかをと」と言ふ程に暮れぬれば、「女の異腹の兄が」わりごさがして食はせんとするに、この佐をやりすぎず。この男、休む

やうにて、降りて、

《和歌》【兵衛佐】人知れぬ心たゞすの神ならば思ふ心をそらに知らなん
返し、

《和歌》【妹】社にもあだきねすゑぬ石神は知ること難し人の心を
またもおこせけれど、この兄せうと、いそがして、車に乗せて、ゐて去ぬ。

これらのような特徴は、どのように解釈すべきであろうか。それはおそらくは、「作り物語」でありながらも、『篁物語』の贈答歌あるいは単独歌がある一つひとつの章段は、いわゆる「歌物語」のような章段構成を、極めて強く意識して創作されているということを意味していると考えられる。単に「歌物語」的な部分が説話的部分と組み合わされているというだけなのではなく、贈答歌場面一つひとつが、一つの「歌物語」の一場面として創作されていると、見るべきなのではないだろうか。そして、それらを連結するかのようには、他の「会話・心話を中心した部分」がつなぎ役として接続されて、全体として一つの「作り物語」が形成されていると把握できるように思われる。

また、次のような点も明らかにできる。上述のように、贈答歌は文章構成上、特徴的位置にあるが、序段から第三段（前半）まで（構想段階が異なる「兵衛佐横恋慕譚」の第五〜九段を除く。六章参照）、つまり物語のほぼ半分までは、各章段の贈答歌の最後の歌の直後を「か」系指示代名詞（かく、かく、かくて、かく、かく、かかる）で受ける文体で統一されている。即ち、挿入部を除く第十三段までは同じ均質な文体で統一的に構成されたことが見えてくる。

このような、新たな作品解釈を可能にしている点に、本稿のような「贈答歌と会話と段落から見た」文章構成の考

察の意義があると考ええる。

そのような新たな視点から、『篁物語』の原作者がその脳裡にて意図したであろう作品の構成を、より理解しやすいようなかたちで示すことを企図し、章段の区分という現代人のわれわれが目に見えやすいかたちに構成した全文を、試案として5節のまとめの後に、6節として提示しておくことにする。

5 結びとして——章段構成から見える原作者の意図と文学史的位置づけ

4節まで略説した『篁物語』の構成の特徴および最後の6節で示したその全文の章段構成とを総合的にみると、『篁物語』の文章構成は、およそ次のようなものと把握される。

即ち、一定の主題をもつ（漢学の教養、兵衛佐の懸想、継子苛め譚、亡霊譚、三女至福譚等）複数の説話的小話（安部（2018: 5））を内容的に併行させつつ進展させる筋立て（ストーリー）を、時に地の文で語り、時に発話・心話で展開させながら、一方で、贈答歌を中心としたかなり独立性の強い場面を筋立てに従って複数準備し、それを物語の展開に従った地の文や会話の中に、あたかも歌物語の一章段のように、断続的あるいは時に連続的に組み込みながら、双方が交互に展開して、進行していく物語文章のスタイルになっている。簡略に言えば、「歌物語風の作り物語」、「歌物語的要素を残し、（中国文学ほか、既に指摘されているような）典拠を背後に持つ説話風の要素も組み込んだ（独自の）作り物語」なのではないか、と。

その点を十世紀後半という『篁物語』の成立説と併せて文学史の中で位置づけてみると、『伊勢物語』『平中物語』『大和物語』と、説話的物語とも言える『竹取物語』との後を受け、それらどちらの要素を持ちながらそれらを融合

した創作を意図したのではなかったか。そしてそれは、そのあとに現れることになった、多くの歌や引き歌を物語の展開の中に縦横無尽に組み入れている『源氏物語』へと、展開していく物語文学の流れの、ちょうど中間的作品に当たっているのではないか。言うなれば、「歌物語」+「つくり物語」↓「作り歌物語」という新しい文章、文学の誕生ということの意味してはいないだろうか。

これは、あくまで、本稿(3節)で採用した、どちらかという和日本語学的視点からの分析と考察の結果からたどりついた解釈である。しかし、『篁物語』に関する類似する指摘は、既に文学の世界からも指摘されている。最後に、それを紹介して、結びとしておくことにしたい。

福家俊幸(1997:2)は、『篁物語』にある歌が、小野篁の実際の歌を一首も引かず、また、その主題の一つとなっている小野篁の『古今和歌集』の歌をも直接は引いていないなどの意味を考察し、次のように言う。(1)ここでは福家(1997:2)として『歌語り・歌物語辞典』に記された表現から引用しているが、同趣旨の福家(1997:3)も参照されたい。

「歌物語の代表的な作品である『伊勢物語』は実在の在原行平の詠歌を基礎として、そこから「昔男」の物語へと発展していった様相が読み取れる。(中略)既存の歌が主体となって物語が生み出されるといえるのは、それだけ見れば、歌物語の手法に通じる。とすれば、『篁物語』はその元となった和歌をえて不在にした【引用者注】元となる先行の歌もあえて隠した【歌物語であると言ってみることもできるであろう。(略)この元となった歌が不在となった事実は、文学史の上での歌物語から作り物語への過渡性を反映しているのか(中略)。ここで『篁物語』の作者は、歌物語の手法を援用して、意図的に虚構へ傾斜した、創作作品を創ろうとしたのではないか。歌物語の手法を異化して、小野篁を主人公とした、独自の創作的伝記物語のようなものを創ろうとした作者の目論見(中略)『篁物語』作者の、先行する文学に対する挑戦の姿勢」(224頁)(傍線・傍点引用者、以下

同じ)

この福家氏のような見方は、本稿の日本語学的とも言える章段分析からたどりついた解釈と、近似していると思われる。右のような文学的解釈と、それとは異なる観点からの分析とが一致して、一定の特徴を掌握できたことは重要と思われる。

また、福家の指摘は「和歌」へ注目したものであったが、「説話」という観点からも、類似する見方がある。福家論文のかなり以前に、山口博(1967)は、次のように述べている(山口(1967)は、『篁物語』を説話的に見ており、その成立時期を、竹取と源氏との間と解釈されており、以下の記述もその解釈のもとに述べられている)。

「篁物語においても、事実と異なる篁を創作したのも、あるいは古今集の歌六首を「一首も利用しなかったのも、(中略)と改作したらしいのも、事実にあらざる虚構とするための巧みな方法であった。」(525頁)

「平安の物語の虚構の第一作として、竹取物語があげられる。その竹取は、(中略)現実的な姿において描く事ができなかった点に限界があった。それが篁物語においては、現実の立場において【引用者注】小野篁という史上上の人間を持ち出して【描き得たのである。【改行】『篁物語』は虚構である。事実ではない。(下略)】(522頁)

「しかし、【引用者注】竹取等の【伝承文学からやがて説話性の濃い物語へ、更に写実的作り物語へ移ってくる物語の発展を考えた場合、説話と虚構よりなるこの篁物語は、もっと注目されてよいのではないだろうか。】(536頁)

「此の物語は、（中略）それが【注Ⅱ『篁』の構成・描写が緊密でなく未熟という点が】説話から作り物語への発展段階上にある事を認めるなら、その不緊密故に、篁物語は一層重要になってくるのである。」（536頁）

山口氏も、やはり同じく『古今和歌集』の歌も小野篁の歌も敢えて取り入れていないことも重視しつつ、「説話」「虚構」という視点からも、この作品の位置付けを同じように問題提起している。山口氏の指摘の初出は1957年まで遡り、福家氏の指摘でも20年以上前になるが、福家氏の論に山口論の引用も注記もない。視点が「和歌」と「説話」との相違がある故であろうか。二人が提起したこの問題は、小品故か、その後の『篁物語』の研究史でもあまり顧みられてはいないように見える（注1）。

これらの文学史上の解釈は、本稿のように、実際の作品の文章・文体を証左とした章段構成の考察からたどり着いた結論とも一致しているように思われる。本稿6節で提示した章段が、単に物語を切っただけのように見えるやもしれない。しかし、本稿が示したかった問題提起は、これらの文学史上の指摘にも重なるものと思われる。『伊勢物語』等の「歌物語」以後、多くの歌を巧みに組みこんだ作り物語である『源氏物語』以前の中間的時期において、この原作者が試みた「作り〈歌〉物語」とも言えるであろう本作品の、文学史的位置付けの問題であった。

また、歌が作品の重要な要素として多く組み込まれた物語、という点では、『宇津保物語』への連続性よりも、多くの和歌・引き歌が本文内部の表現や物語の展開に深く入り込んでいる『源氏物語』への連続性の方が、より強いように思われる。実際に、『源氏物語』への『篁物語』の影響は、浮舟の死の場面（井野葉子（2011））や夕霧の「六位宿世」という人物造形も含め、直接的な影響関係が指摘できるのである（安部（2017）ほか）。その「和歌だらけ」の『源氏物語』は、確かにある意味で「歌物語の手法を援用して、意図的に虚構に傾斜した、創作作品」（福家

(1997) の上記の記述) とも言えそうなほどに、歌物語的「面」も残している『篁物語』に近似していると言えないだろうか。

小品ながら、山口氏、福家氏が異口同音に指摘するように、「歌物語」でもなく、「説話」とも異なる新しい創作である「作り歌物語」としての、『篁物語』の文学史的意義を、再評価しておく必要があると思われるのである。

6 『篁物語』の作り歌物語文章としての章段構成(試案)

最後に、『篁物語』の本文を、具体的に、3節に示した2部(■マーク)、8章(◆マーク)、23段(○マーク)に区分して提示する。

なお、念のために付言しておけば、本作品を、他の「歌物語」と同じようにして章段分けすべきであるという意図ではない。この作品の作り手の意図と作品の構成や文章をより理解するための、比喩的に言えば、いわば展開図、見取り図のようなものと言えようか。

『篁物語』の本文は、日本古典文学大系本(影考館本)をもととし、便宜的に漢字・ルビほか表記等を改めた箇所がある。補助記号の凡例は下記の通りである。

補助記号 凡例

「」 発話・会話部分。

『』 心話(心内語)部分。

贈答歌と会話と段落構成から見た『篁物語』という「つくり歌物語」の創出(安部)

本文の該当段落の「はじめ～おわり」部分	歌物語の段落／説話的段落で二分した場合	贈答歌■／会話・心話の多い展開	篁の呼称(「せうと」「男」「篁」)
「親の～読ませける。」	(一) 歌物語的段落の 前部	会話・心話多い	
「この男～けうとくなかりけり。」【この男=指示詞人物】		贈答 5首	男3例
「師走のもちごろ～うそぶきありきけり。」 【師走のもちごろ=月日時明記】		贈答 2首	男1
「さて、《明日に》～作りかへる。」【さて=接続詞】(あした、の位置不審)		贈答 3首	男3 ／【「篁」1父主】
「さて、この女～如月の初午に～道中に去にけり。」【さて=接続詞、如月の初午=月日時明記】	(二) 説話的段落(中間部=「兵衛佐横恋慕譚」前半・後半あり)	冒頭は地の文、後半は会話・心話多い	せうと2 ／【「篁」1自身】
「さる程に～ゐて去ぬ。」【さる程に=接続詞】		贈答 2首	せうと1
「この佐、人をつけて、(あしたに文あり。～)～又もあひなん」【このすけ=指示詞】		贈答 3首、 会話・心話多い	せうと2
「また、これをれいの童、もて来たり。～と思ひ居り」【また=接続詞】		会話・心話多い	せうと3 ／【「男」1兵衛佐】
「この兄、例のごと～入りにけり。」【このせうと=指示詞】	会話・心話多い	せうと1	
「例の書読みに～久しくも語らはずあり。」【例の=指示詞】	(三) 歌物語的段落の 後部	贈答 3首	せうと1>男1
「されど、いかでか～書読む心ちもなし。」【されど=接続詞】		贈答 2首	
「例の、さよりはせず～(歌)～うつらざりけり」 【例の=指示詞、春=月日時明記】		贈答 2首	せうと2
「かかることを～曹司に籠りて泣きけり。」 【かかること=指示詞】		贈答 2首	男1 ／【「男」1父主】
「夜あけにければ、曹司に帰りて、～泣きまどへどかひなし。」	贈答 3首		
「その日のようさり～夜の明けにければ、なし。」【その日=指示詞】	贈答 2首		
(夜の明けにければ)「親は捨てて～一人なん、有りける。」	(四) 説話的段落	地の文	せうと1>せうと1>男1
「時の右大臣の～大学へ入りにけり。」	(1) 説話的段落	地の文	
「殿に帰へりて、～よき日して呼び給ふ。」		会話・心話多い	
「御消息ありければ、～具し給ける。」		会話・心話多い	【「篁」1(地)】
「さて、この頃、～泣きをりける。」【さて=接続詞】	(2) 歌物語的段落	和歌 1首	
「久しう来ねば、大臣殿、～と言ひける。」		贈答 2首	男1
「この男は～文作る人は。」【この男=指示詞】	(3) 説話的段落	地の文	男1 ／【「篁」1(地)】
「今の人～文作る人は。」		地の文	
「また、かように、～」		地の文	

表1 『篁物語』の文章構成

上位区分 前後2部	中位区分(5 章+3章)	下位区分(計23段+1行)	3テーマ別分類(漢学(第Ⅰ・Ⅱ部)・兵 衛佐・亡霊譚)／+【漢才語彙】
第Ⅰ部	第一章	一段(序段)	I【才・書・読む・博士・大学】
		二段「妹の家庭教師」	II【文の点・角筆】
		三段「師走の月夜」	III ◇〈挿入的段落〉時節「師走のもちごろ」
		四段「せうとの懸想」	IV【書・角筆・手文】
	第二章	五段「如月初午稻荷詣 1」	(1)「兵衛佐横恋慕譚」(五段～九段)
		六段「如月初午稻荷詣 2」	(2)
		七段「兵衛佐の懸想文と和歌の贈答」	(3)
		八段「兵衛佐の消息と篁の妨害」	(4)
		九段「篁・妹口争い」	(5)
	第三章	十段「篁・妹心通ひ」	V【書読み・内侍・書・教ふる】
		十一段「妹懐妊」	VI【書・読む】「書読む心ちもなし。」(漢学語彙ここで一旦途切れ第Ⅰ部最後十六段「法華経を書き」で再び現れる)
	第四章	十二段「春の橘」	VII ◇〈挿入的段落〉【大学の主する】・時節「春のこと」(呼称「せうと」段落)
		十三段「妹の幽閉」	①(妹への継子奇め譚的部分)
		十四段「妹の悶死」	②(妹への継子奇め譚的部分)
		十五段「妹の招魂と亡霊」	③(妹亡霊譚)
	第五章	十六段「葬送・招魂」・「法華経供養・後日譚」	④(妹亡霊譚)【法華経を書き】
第Ⅱ部	第六章	十七段「漢詩献呈」=第Ⅱ部の「序段」	i【文(漢詩)・大学】
		十八段「三の君婚姻受諾」	ii
		十九段「新枕と三日の儀」	iii【文の帙・文巻】
	第七章	二十段「亡霊譚(続)」	⑤(妹亡霊譚)
		二十一「新妻との問答」	⑥(妹亡霊譚)
	第八章	二十二段「篁出世話」・「末娘致福譚」	iv【才学・歌詠み】
		二十三段「回顧」=学生評と新旧の時世対比	v【大学・才】
		●二十三段の最後(彰考館本で2文字分空きの後の1文)	vi【文】

【一】消息部分(その中に和歌を挟む場合もある)。

《和歌》和歌の部分を示す。

四角の枠付け語句 \parallel この・さて・かく・れい等。段落・場面の切り替え部分の冒頭に現れる指示詞・接続詞等お

よび段落・場面の終り近くの一文に現れる表現等を囲み枠で示した。他の例 \parallel その、 \sim ば、かかる等。

【二】本稿執筆者注記部分(発話・心話の主体、表記ほか補注など)。

【段落番号のあとの記載1「場面名」 \parallel 各章段毎に仮に場面名を付けた(例、「師走の月夜」)。

【段落番号のあとの記載2「贈答/発話・心話」 \parallel 歌が中心の章段では歌数を示した(贈答歌であれば贈答とした)。

【会話・心話を中心とした展開の章段では【会話・心話での展開】と示した。

【太文字部分 \parallel 本文解釈上、注意すべき語句を太字で示した。例えば、篁に対する呼称、章段構成上の接続詞・指示代名詞等、「漢才」「漢学」というテーマに関わる語彙、などである。

和歌の傍線部 \parallel 贈答歌では、相互に、同語・同義語・類義語、縁語、類似する表現などが使用され、それらが密接な関係をもつ和歌であることが明確に示されている。それらの関連表現に傍線を付した。いくつかの先行研究で既に言及があり、三浦(2000)では第一部の和歌のみを対象にして詳しく考察されている。三浦(2000)を参考としつつも傍線語彙は加除し、和歌の組合せの切れ目も三浦に従わなかった箇所がある。なお、贈答形式になっていないものでもそのような語彙の関連が認められる前後の和歌があり(井野葉子(2011)が指摘する3首)、また、同語・類義語が無い場合でも既存の和歌を媒介として、あるいは縁語の連環によってつながっている和歌(三浦(2000)に解説あり)もある。

太線部 \parallel 十四段 \sim 十六段の太線の「泣く・涙」の語彙と表現は、『古今和歌集』八二九番歌との関連が強い部分

を示す（安部（2019, 3）参照）。

空の行Ⅱひとつの章段の中でも、場面展開や内容上、あるいは、文章構成上（例えば、地の文から会話中心の文章へと展開する等）、小さな区切りが認められる箇所は空行を挿入した。

『簞物語』——文章構成の解釈試案——

■第一部

◆第一章

○一段（序段）【会話・心話での展開】

親おやの、いとよくかしづきける、人のむすめ、ありけり。

女のするざえ【才】のかぎりしつくして、今いまは

【親】『書ふみ』【書物・漢文】読よません』

とて、

【親】『博士はかせ』にはむつまじからん人をせん』

とて、異腹いへはらの子この、大学だいがくの衆しゆうにてありけり、異腹いへはらなりければ、うとくて、

【妹】「あひ見みず」

などありけれど、

贈答歌と会話と段落構成から見た『簞物語』という「つくり歌物語」の創出（安部）

【親】「知らぬ人よりは」

とて、すだれ越しに、几帳たててぞ、読ませける。

○ 二段（妹の家庭教師） 贈答 5首

【この男】いとおかしきさまを見て、すこし馴れゆくまゝに、顔を見え物語などもして、文のて【点カ】といふものを取らせたりけるを、見れば、かくひち【角筆】して、一首をなん、書きたりける。

『《和歌》【篁】なかにゆく吉野の河はあせなん妹背の山を越えて見るべく』
とありければ、

【妹】『かゝりける』

と心づかいしけれど、

【妹】『なさけなくやは』
とて、

『《和歌》【妹】妹背山かげだに見えでやみぬべく吉野の河は濁れとぞ思ふ

また、男、

『《和歌》【篁】濁る瀬はしばばかりぞ水しあらば澄みなむとこそ頼み渡らめ

女、

『《和歌》【妹】淵瀬をばいかに知りてか渡らむと心を先に人の言ふらん

男、

《和歌》【篁】身のならむ淵瀬も知らず妹背川降り立ちぬべきこゝちのみして
かく言ふ程に、人にくからぬ世なれば、いとけうとくなかりけり。

○ 三段（師走の月夜） 贈答 2首

師走のもちごろ、月いとあかきに、物語しけるを、人見て、

「誰ぞ。あな、すさまじ。師走の月夜ともあるかな」

と言ひければ、

《和歌》【篁】春を待つ冬のかぎりと思ふにはかの月しもぞあはれなりける

返し、

《和歌》【妹】年をへて思ふもあかじこの月はみそかの人やあはれと思はむ 【一説…詠み手「人」】

かく言ふ程に、夜ふけにければ、

【妹】「人うたて見んもの」

とて、
入りにけり。

男は、曹司にとみにも入らで、うそぶきありきけり。

○ 四段（せうとの懸想） 贈答 3首

さて、あしたに、久しく書読ませざりければ、

父ぬし、「あやしく篁が見えぬかな」【父主】

と言ひて、呼びにやるに、男来て、れいの、書かき集めて教へけるまゝになん、この女のみ心に入りて、ひがごとをのみなむ、しける。かう教ふる中に、かくひち【角筆】して、

【消息】【篁】『かやう、初の【物の】書は、ひがごとつかうまつるらん。このごろは、物覚えずぞや。』

《和歌》【篁】君をのみ思ふ心は忘られず契しこともまどふ心か
返し、

《和歌》【妹】博士とはいかゞ頼まむ人知れずもの忘れする人の心を

又、男、

《和歌》【篁】読み聞きてよろづの書は忘るとも君ひとりをば思ひもたらん

かくて、この男は、てふくみ【手文?】をぞ、常に作りかへける。

◆第二章

○ 五段（「如月初午稻荷詣 1」）（「兵衛佐横恋慕譚」の序段、以下、第九段まで「兵衛佐」の段）

さて、この女、願ありて、如月の初午に、稻荷に詣りけり。

供に、人多くもあらで、おとな二人・童二人ぞ、ありける。おとなはいろ／＼の桂、二人は同じ色をなん、着たりける。君は、綾のかい練りの単がさね、唐のうすものの桜色の細長着て、花染めの綾の細長をりてぞ、着たりける。

髪はうるはしくて、たけに一尺ばかりあまりて、頭つきいと清げにて、顔もあやしく世人には似ず、めでたくなんありける。男の童三四人、さては、この兄とぞ、ありける。ませにはあらねど、先立ちをくれて来ける。

詣でざまに困じにければ、兄いとおかしがりて、

【篁】「篁にかゝり給へ」

とて寄りければ、

【妹】「いで、いな〜」

と言ひて、道中に去にけり。

○ 六段 (如月初午稻荷詣 2 (兵衛佐との和歌の贈答) 贈答 2首

さる程に、兵衛佐ばかりの人、かたち清げにて年廿ばかりなりけるが、詣であひて、かへさに、女の道にゐたる、

【佐】「あな、くるし。かくてやは、出で立ち給へる」

もの嫉みして、男【兵衛佐】申に、

【佐】「かしは車作りて、このわたりなる木さきの屏にすへ奉らん。女の身には大王、みかどには誰をかをと」

と言ふ程に暮れぬれば、【兄】わりごさがして食はせんとするに、この佐をやりすぐす。この男、休むやうにて、降りて、

《和歌》【佐】人知れぬ心たゞすの神ならば思ふ心をそらに知らなん

返し、

《和歌》【妹】社にもあだきねすゑぬ石神は知ること難し人の心を

またもおこせけれど、この兄、いそがして、車に乗せて、ゐて去ぬ。

○ 七段（「兵衛佐の懸想文と和歌の贈答」） 贈答 3首

【この佐、人をつけて、

【佐】「いづくにか、率て去ぬる」

と見せければ、

【人Ⅱ童】「その家」

と見てけり。あしたに、文あり。

【消息】【佐】『神の教へ給しかばなむ、さして奉る。かの石神の御もにて、今日あらば』

文を【女が】取り入れて見れば、この兄、出で走りて、

【篁】「父ぬし聞き給に。いともの騒がしう。この童はいづくから来たるに【書陵部本「来たるぞ」】。いづれのすき者

の使ひぞ」

と言ひければ、

【童】「御文は奉らせつれど、昨日いませしめしの、『いづれの使ひぞ』【兄Ⅱ篁】との給を、うちからは翁びたる声に

て、『なにこそぞ』【親Ⅱ父主】などの給つれば、わづらはしさになむ、参で来ぬる」

と言ひければ、

【佐】「とうめの童や」

と言ひて、またのあしたに、

【消息】【佐】『昨日の御返。たびく、いとおぼつかなし。この童の、あとはかなくて参で来にしかば。

《和歌》あとはかもなくやありにし濱千鳥おぼつかなみに騒ぐところか【こゝろか】』

この兄、大学に出でにけり。樋洗童、取り入れて奉る。文をも取り、

【妹】「大学のぬしもふみつくる【ぬしもぞ見つくる】。近からん、人の家にすゑよ」として、

【妹】『昨日も見しかども、いさや』

《和歌》【妹】たまばこの道交ひなりし君なればあとはかもなくなると知らずや見て、

【佐】『ざれたるべき人かな。うたて、まがくしうもいりたるかな。いかに言はまし』と思ふ。時【時の】、大納言の子なりけり。

【消息】【佐】『あとはかまなしと、誰も。道にこそゐ給へりしか。』

《和歌》【佐】しばくにあとはかなしと言ふことも同じ道には又もあひなん』

○ 八段 (「兵衛佐の消息と篁の妨害」) 【会話・心話での展開】

また、これをれいの童、もて来たり。兄、道にさしあひて、

【篁】「今これより」

と言ひて、やりてけり。

【童】「かく」

など言へば、

【佐】「れいの、心肝もなき童かな。先にけしきあしう言ひけむ人にや、取らすべき。この稲荷にて、まならひものし

げに思へりし者ぞや。男よりのものぞや。そもそも、御返」
とりてやりつ。

【篁】『御返りにくし』

と思ふものゝやうに、兄、出であひて、

【篁】「御文奉り給人は、夜べ男にぬすまれたまひしかば、求めにゆくを。もし、この御文給へる人とも知らず。うち率ていけ」

と言ひければ、しりへ答ふに答へて、走りにけり。

【佐】『さもあらん』

と思ひて、文もやらざるにけり。女、兄のはかりたるとは知らず、

【妹】『あやしうをとづれぬ』

と思をり。

○ 九段（「篁・妹口争い」）【会話・心話での展開】

この兄、れいのごとあるなり。

【篁】「道あひの、知りも知らぬ人に、文かよはし懸想じ給、人の御心こそありけれ。かの人は、御妻にやがてあはせ奉らん。仲人こそよからめ。ゆるされたまはでは、不用ぞ」

など言ひければ、

【妹】「なでう、目にかつかん。いかに知りてか、ともかうも思はん」

【篁】「世を知らざらん人は、さやうにも言はでこそあらめ。見つかずの御ありさまや。心うしと。思はずなり」
など言へば、妹いとおしうて、

【妹】「なにか、目にちかざらん人を、しひも見給へと、思はん」
とて、入りにけり。

◆第三章

○ 十段 (「篁・妹心通ひ」) 贈答 3首

れいの書読みに、【親】『内侍になさん』の心ありて、親は【娘に】**書教ふる**なりけり。

文かよはしにはしゝたれど、この**兄**せうと心をまどはして、思ひ出でられけり。男、言ふやう、

【篁】「かく思ひ出でられ、かぎりなき心を思知らずして、よそなる人を思ひたまへるこそ、つられれ。」

《和歌》【篁】目に近く見るかいもなく思ふとも心をほかにやらばつらしな

と言ひければ、

【妹】「人の御心も知らずや。」

《和歌》【妹】あはれとは君ばかりをぞ思ふらんやるかたもなき心とを知れ

思ひくさなや」

と言ひければ、【篁】すこし心ゆきて、

《和歌》【篁】いとゞしく君が嘆きのこがるればやらぬ思ひも燃えまさりけり

かく言ひて、心はかよひけれど、親にもつゝみ、人にもさはりければ、心とけて久しくも語らはずあり。

○ 十一段 「妹懐妊」 贈答 2首

【ざれど】いかでか入りけむ、この妹の寝たるところへ入りにけり。いとしのびで、まだ夜ぶかく、出でにけり。

たまさかに、這い入りくたりけれど、あふことは難かりけり。常に向かひるたりければ、夜はあはず。中く心にそらにて、

【篁】『いかにせん』

と思ひ嘆きて、

《和歌》【篁】うちとけぬものゆへ夢を見て覚めてあかぬもの思ふころにもあるかな

返し、

《和歌》【妹】いを寝ずは夢にも見えじをあふことの嘆くくもあかしはてしを

かく夢のごとある人は、はらみにけり。書読む心ちもなし。

◆第四章

○ 十二段 「春の橋」 贈答 2首

【人々】「れいの、さはりせず」

など、うたてあるけしきを見て、人々言ふ。

この兄も、

【篁】『いとをし』

と見て、春のことにやありけん、ものも食はで、はなかうじ・橘をなむ、ねがひける。知らぬ程は、親求めて食はせ、兄、大学のあるじするに、

【篁】『みな取らまほし』

と思ひけれど、二三ばかり、たゝみ紙に入れて、取らず。

《和歌》【篁】あだに散る花橘のにはひには緑の衣きぬの香こそまさらめ

【消息】【篁】『これをきこしめすなればなん。』

返事に、

【消息】【妹】『御ふところによりければなん、

《和歌》【妹】似たりとや花橘をかぎつければ緑の香さへうつらざりけり』

○ 十三段 「妹の幽閉」 贈答 2首

かゝることを、母おとゞ聞き給て、ものもの給はで、うかゞひたまひて、向かひたまひたりけるを、手を取りて、引きもてゆきて、部屋にこめてけり。これを、父ぬし聞きたまひて、のどかなりける人なりければ、

【父主】「男もかしこき者にて、女おさなき者にあらず。さしたるやうあらむな。なをゆるしたまひて、の給へ」とありければ、

【母主】「おのが身を思ふとて、の給に」

とて、いよく鍵の穴に土ぬりて、

【母主】「大学のぬしをば、家の中に入れそ」

とて、追いければ、曹司にこもりゐて、泣きけり。

妹のこもりたる所にいきて見れば、かべの穴いさゝかありけるを、くじりて、

【篁】「こゝもとに寄り給へ」

と呼び寄せて、物語りして、泣きおりて、出でなまほしく思へど、まだいと若くて、いたりたべき人もなく、わびければ、ともかくもえせで、いといみじく思ひて、語らひをる程に、夜あけぬべし。

男、

《和歌》【篁】かずならばかゝらましやは世の中にいと悲しきはしづのおだまき返し、

《和歌》【妹】いさゝめにつけし思ひの煙こそ身をうき雲となりてはてけれと言ひて、泣きあへりけり。

○ 十四段 「妹の悶死」 贈答 3首

夜あけにければ、曹司に帰りて、この女食ひつべきやに、ものをてかへて、もてゆかんとするに、心まどひて、足もえふみたてず。もの覚えざりければ、むつまじく使ふ雑色を使ひにて、

【篁】「たゞ今心ちあしくて、え参り来ず。その程これすき給へ。ためらひて、参らむ。」

女、穴のもとにて待つに、【雑色が】かく言ひたれば、

《和歌》【妹】誰がためと思ふ命のあらばこそ消ぬべき身をも惜しみとゞめ

取り入れず。帰りて、

【雑色】「かくなむ」

と言ひければ、かしこくして、またくいきて見れば、三四日ものも食はず、もの思ひければ、いとくちおしく息もせず。

【篁】「いかゞおはします」

と言ひければ、

《和歌》【妹】消えはてて身こそは灰になりはてめ夢の魂君にあひそへ

返し、

《和歌》【篁】魂は身をもかすめずほのかにて君まじりなばなにかはせん

とて、よろづのことを言ひて泣けど、答へせずなりにければ、

【篁】「死ぬ」

とて泣き騒げば、声を聞きて、とき【解き】あけて見れば、絶へ入るけしきを見て、まどる出て、ほかの家に去にけり。親出でてのちに、ゐで、率て入りて、見れば、死にて臥せり。泣きまどへどかひなし。

○ 十五段 (「妹の招魂と亡霊」) 贈答 2首

【その日】のようさり、火をほのかにかきあげて、泣き臥せり。あのかた、そめきけり。火を消ちて見れば、そひ臥す心ちしけり。死にし妹の声にて、よろづの悲しきことを言ひて、泣く声も言ふとも、たゞそれなりければ、もろともに語らひて、泣くくさぐれば、手にもさはらず、手にだにあらず。ふところにかき入れて、わが身のならんや

うもしず、臥さまほしきことかぎりなし。

《和歌》【篁】泣き流す涙の上にありしにもさらぬあはの山かへる

女、返し、

《和歌》【妹】常に寄るしばしばかりは泡なればついに溶けなんことぞ悲しき
といふ程に、夜のあけにければ、なし。

◆第五章

○ 十六段 「葬送・招魂」・「法華経供養・後日譚」 || 第一部の終段（この段の前半のみ前段からの「泣く・涙」

表現が一度断絶し、かつ、「男」だった呼称が「せうと」へと変化する。）

親はすてて去にければ、とかくおさむることは、たゞ、この兄ぞ、しける。

人はみなすててゆきにければ、たゞ、この兄、従者三四人・学生一人して、この女を死にける屋を、いとよくはらひて、花・香たきて、遠き所に、火をともしてゐたれば、この魂なん、夜なく来て語らひける。

三七日は、いとあざやかなり。

四七日は、とき／＼見えけり。

【この男、涙つきせず泣く。その涙を硯の水にて、法花経を書きて、比叡の三味堂にて、七日のわざしけり。

その人【妹の霊】、七日はなしはしても、ほのめくこと絶えざりけり。

三年すぎては、夢にも、たしかに見えざりけり。なを悲しかりければ、初めのごとしてなん、まかせたりける。妻

にも寄らで、ひとりなん、ありける。

■ 第二部

◆ 第六章

○ 十七段 (「漢詩献呈」) Ⅱ 第二部の「序段」 Ⅱ

時の右大臣のむすめ賜へと、文をおもしろく作りて、内に参り給とて、御車よりとりたまふとに、ついふるまいて、奉れたぶに、取りて見たまひ、

【右大臣】「うけ給りぬ。今。家にまかりて、御返聞えん」
との給。大学に入りにけり。

○ 十八段 (「三の君婚姻受諾」) 【会話・心話での展開】

殿に帰りて、御女三人おはしけり。

大君に、

【右大臣】「しかゞのことなん、ある。いかに」と聞え給へば、怨じて、泣きて入り給ぬ。

中君、同じごと聞え給。

三君に聞えたまふ。

【三君】「ともかくも、おほせごとにそ、従はめ」

との給へば、いと清げに寢殿作りて、よき日して呼び給。

○ 十九段 「新枕と三日の儀」 【会話・心話での展開】

御消息ありければ、いと悲しう、椽の、やれ困じたる着て、しりゐたる沓はきて、ふくめる、**文のち**取りて、来にけり。帳のうちに入りて、まづ、この**文卷**を奉れば、取り給はねば、**篁**さしていけば、この君、皮の帯を取りて、引きとめ給へば、とまりたまひにけり。これをかいまみて、父おとゞ、見たまひて、

【右大臣】「いとかしこくしつ」と喜びたまふ。

【右大臣】「出でて去なまし。いかに、人聞き、やさしからまし。いとかしこきことなり」と喜びたまふ。

三日の夜、いとかめしうて待ち給。たゞ童ひとりぞ、具し給ける。

◆第七章

○ 二十段 「亡霊譚（続）」 和歌 1首

さて、このころ、妹のありし屋にいきたりければ、いと悲しかりければ、寝にけり。妹、

《和歌》【妹】見し人にそれかあらぬかおぼつかなもの忘れせじと思ひしものを
と言ひければ、かの殿にもいかにてぞ、**泣き**をりける。

○ 二十一 段 (「新妻との問答」) 贈答 2 首 (この段のみ会話・心話の直前に話者が直結揭示される)

久しう【男】来ねば、

大臣殿、『あやし』

と思したりけり。

七日ばかりありて、【男】来たり。

【右大臣】「などか、見え給ざりける」

とのたまへば、すなをなりける人にて、ことかくして言ひければ、

妻、「いとあるべかしきことにて、あはれのことや。わがためにも、さらずはおはせめ、わいてもこそは、むかし人は、心もかたちも、さものし給ければこそ、年をへて、え忘れがたくし給らめ。さる人を見たまひけんに、言ひ知らで見え奉るよ。後世いかならん。

《和歌》【妻】あかずしてすぎける人の魂に生ける心を見せたまふらん

あな、はづかし【妻】

との給に、

男、「なにか、それは思しめす。かくては、はてはえ知しめさじ。御魂のあるやうも見るべく、こゝろみにさへ、なり給はぬ」【篁】
とて、

《和歌》【篁】「別れなばをのがさまぐなりぬともおどろかさねばあらじとぞ思

出でてまかりしを、引きとめて、今日まで、さぶらはせたまふ。うるさしかし」

と言ひける。

◆第八章

○ 二十二段（「篁出世話」・「末娘致福譚」の後日譚）

【この男は、若き間は、いとねんごろにあはで、ほかに夜がれなどもしけり。なり出でて、宰相よりも上になりけり。これなん、名にたつ篁なりける。才学はさうにもいはず、山たつこともえたり顔、この国人には、たらずぞありける。このこんまうのゝこて【この子・孫の子まで】、かく歌よまぬはなかりけり。

聞きたまはざりし姉二所は、いとわろき人の妻にて、この御徳を見給ける。いとよくなり出でければ、この三君を、また二つなくもてかしづき奉る。

○ 二十三段（「回顧」Ⅱ学生評と新旧の時世対比）Ⅱ第Ⅱ部の終段

【今の人、まさに大学のせうを、むこに取る大臣もあらむや。昔の人は】たゞ、心・かたち・才おとり【才を取らり】給なるべし。

□□【※注】☒、あらしかし、かやうに思ひて、文作る人は。

※注（水戸影考館本の甲本・乙本共に、この□□個所に2文字分の空白あり。安部（2018.3）での『伊勢物語』

四十段での考察とも合わせて検討すると、この一文のみは後日の別記か。後考を期す。）

* * * * *

【注1】

これらと着眼点は異なるが、やはり『篁物語』における「物語を作るといふ新しい試み」を指摘しているという点で類似する近年の研究に、次の中村祥子(2009)もある。中村氏は、『篁物語』の典拠とされている『古今集』哀傷八二九番歌が「哀傷」に属しながらも「恋」歌としても読めるという要素を書き手が「意図的に」生かすことで、「新しい創作方法を獲得した」作品であるとする。しかし、その論でも、やはり山口(1964)、福家(1997)の解釈には触れられていない。

中村氏は、以下のように述べる(傍線引用者)。

「これまで『篁物語』は、篁の【引用者注：実在の小野篁の歌である『古今和歌集』の「卷十六哀傷」】八二九番歌から、「妹の死への嘆き」という発想のみが主に汲み取られてきたが」(はじめに)

『古今集』の部立とは外れる「ある篁像」を描き出すため、実作歌そのものを用いず暗示させる点に、この物語の特異性と作者の創作態度を見ることができるとはでないか。物語に最適な歌を用いずに物語を作るといふ新しい試みが、物語の具体的な展開のなかで拓いたものは何だったのか」(はじめに)

「このように、歌を通して見ると、八二九番歌に対する物語創作者の解釈した世界が先にあって、その解釈に当てはまる『古今集』篁歌が意図的に収集され、物語が組み立てられていったのではないかと思われるのである。このことは物語創作者が『古今集』撰者とは異なる視点から篁を語ろうとしている宣言と言ってもよい。これは物語の創作者が歌の伝達者ではなく、創作する立場にいたるといふ点で新しい」(三二)

「歴史的人物の名や勅撰集(ここでは『古今集』)の権威を借りながら、それとは異なる読み方を提示して、物語創作者の意見や心情を存分に表白する自由を獲得したことである。史実的な枠を巧みに用いながら、虚像に事実らしさを賦与する方法を獲得したことをうかがわせるように思われる(後略)」(三三)

「歌から呼びおこされた物語【注番号略】として、「歌からの物語」という新しい創作方法を獲得した」(三三)

『古今集』の歌の利用法については福家氏と解釈をやや異にする。しかし、「創作者」「創作する立場に在る」「存分に表白する自由を獲得した」「虚像に事実らしさを賦与する方法を獲得した」「歌からの物語」といふ新しい創作方法を獲得した」といふ見方

では、かなり共通しているのではないだろうか。「作り物語」とする山口氏にも近い。文学研究におけるこれら三者の個別の解釈は、「新しい創作方法」「創作的物語」という結論においては共通性が極めて高い。

一方、着眼点が「説話」か「和歌」か、「和歌」のどのような取り込み方かという相違もあるから、それぞれの根拠から、この共通する結論を導き出していることは、（結論は近似していても／近似している故に）果たしていずれに、どれほどに、その説得性妥当性があるのか、が必ずしも客観的に比較しにくいようにも見える。いずれを根拠にしても言えてしまうならば、それぞれは客観的な論拠ではなく、結論部分のみ、即ち創作結果物としての作品のでき上がりが、その文学史的位置として、何となく納得できそうに思わせているだけなのではないか、とも見えてしまう。これら三論を、本論のように相互に比較して論じた研究がないのも、そのようなところに事情があるようにさえ見えてくる。

それは、一方では、それぞれでの解釈の直接の根拠が、『篁物語』に関わる「和歌」ないし「説話」をめぐる各自各様の解釈のみで、『篁物語』という作品それ自体の内部的具体的証左を殆ど伴っておらず、他の受容者側も共有できるような客観的実体が乏しいことにも起因しているようにも見えてくる（『篁』という作品の仕上がり具合しか共通点がないとも言えるか？）。

それはともあれ、3者の指摘は本稿での結論的解釈（「つくり歌物語の創出」）とも極めて共通していることは確かである。このような『篁物語』への「共通した解釈」は、従来の『篁物語』の研究史では、必ずしも通説でもなくかつ一説としても相互に取り上げられることもなく、作品の文学史的位置付けの点でも所謂「文学史辞書」類の解説にて触れられてもいなかった（安部（2014）の辞書解説でも同様）。これら山口・福家・中村の各文学研究者の解釈と、本稿で行った国語学的文章文体史研究法からのアプローチとのこのような一致は、今後『篁物語』の文学史的位置付けとして、辞書・解説書などで記述されるべき水準に至ったことを示していると言ってもよいのではないかと考える。

【拙論前稿への補注——『源氏』夕霧と『篁物語』との関係】

安部（2017.3）で、『篁物語』の「緑のきぬ」の設定や源順の語彙が『源氏物語』に投影していることを指摘し、夕霧の人物設定には小野篁、源順、『篁物語』が影響しているとみなした。その後、次の金孝淑（2009 韓国、書籍化したものは2010に日本刊行）が、『源氏物語』の研究の視点から夕霧の設定と『篁物語』の主人公の設定の類似を指摘していることを見出した。拙論では、井野葉子（2011）、安部清哉（2010）等を受けて直接の影響関係にあると解釈しており、その点で金氏とは異なるが、先行の指

摘として報告しておく。金(2009)が韓国発表でもあり、その後日本で公開された金(2010)の書名からも気づくのが遅れた。

「夕霧の物語はまるで『篁物語』をなぞっているかのような描かれ方をしているながらも、その二つの物語のギャップは極めて大きい。光源氏が夕霧の入学に際して語っていた「かくてはぐくみはべらば、せまりたる大学の衆とて、笑ひ侮る人もよはべらじ」の発言は、『篁物語』に照らし合わせられることによって、その意味するところが鮮やかに浮かび上がってくるのではないかと思う。」(今、金(2010)による)

金孝淑(2009.2)『源氏物語』の夕霧と『篁物語』——その構造と表現の類似をめぐって——『日本文学』78(韓国日本学会発行)

金孝淑(2010.4)「第十一章 大学の学生の夕霧と『篁物語』——その表現の類似をめぐって——」『源氏物語の言葉と異国』早稲田大学出版社(金孝淑(2009.2)を収めたもの)

なおこのついでに補えば、『源氏』研究として、夕霧に対して「緑の衣(きぬ・ころも)」「語彙が使用されていることを詳しく指摘した研究では次の中嶋朋恵(1977)が古いか。夕霧の「みどり」「あさみどり」「あさぎ」と「六位宿世」への言及がある(安部(2017.3)参照)。

中嶋朋恵(1977)「みどりの袖の懸想人——夕霧の恋物語——」『国文学 言語と文芸』84、大塚国語国文学会

【付記】 本稿は次の研究費による研究成果の一部でもある。日本学術振興会科学研究費2017-2019年度基盤研究(C)(基金)／課題番号：17K02785／代表：安部)

【参考文献】

- 岩清水尚(1995)『篁日記』『篁日記の成立』(久松潜一編(1995)『日本文学史 中古』至文堂)
- 菊田茂雄(1995)『新講篁物語』私家版(増訂版1996、秋田大学国文学研究室発行)
- 山口博(1967)『篁物語論』『王朝歌壇の研究——村上冷泉田融朝篇』桜楓社(初出は1957年および1965年の論等)

贈答歌と会話と段落構成から見た『篁物語』という「つくり歌物語」の創出(安部)

- 石原昭平・根本敬三・津本信博(1977)『篁物語新講』、武蔵野書院
- 平野由紀子(1988)『小野篁集全釈』私家集全釈叢書3、風間書房
- 中村祥子(1995)『篁物語』第二部の発想についての私見——『世説新語』賢媛伝とのかかわり——『日本語日本大学』21(台湾・輔仁大学)
- 仁平道明(1995.12)『篁物語』の結婚譚と『孔子家語』「むらさき」32、後に仁平(2000)『和漢比較文学論考』武蔵野書院に再録、こま後者こよる。
- 森中京子(1996)『兄』『学生』という語のイマジネリー——『篁物語』小考『緑岡詞林』20(青山学院日文院生の会)
- 安部清哉(1996.3)『語彙・語法史から見る資料——『篁物語』の成立時期をめぐりて——』『国語学』184
- 福家俊幸(1997.2)『篁物語』『歌語り・歌物語事典』、勉誠社
- 福家俊幸(1997.3)『篁物語』と歌物語——異化の方法』『武蔵野女子大学紀要』32—1
- 三浦則子(2000)『篁物語』における和歌の構成について』『国文白百合』31
- 井野葉子(2011)『源氏物語 宇治の言の葉』、森話社
- 村田菜穂子(2005)『形容動詞の語彙論的研究』、笠間書院
- 中村祥子(2006.7)『生死を隔てた邂逅——『篁物語』と「李章武伝」——』『2006年中国文化大学中日社会與文化學術検討会論文集』(台北市・中国文化大学日本語文学系所出版・発行)(招魂の儀式のこと)
- 中村祥子(2007)『篁物語』における三の君結婚というモチーフ(副題略)』『日本語日本文学』32(台湾・輔仁大学)
- 中村祥子(2009)『古今歌と『篁物語』——八一九番歌から紡がれた物語——』工藤進思郎先生退職記念の会(編)『工藤進思郎先生退職記念論文・随想集』工藤進思郎先生退職記念の会(泣く)「涙」表現との関係
- 安部清哉(2010.1)『篁物語』の井野葉子氏「源氏物語」浮舟巻での引用「説補強ならびに祖形小考」『古典語研究の焦点——武蔵野書院創立90周年記念論集』、武蔵野書院
- 安部清哉(2014)『篁物語』『日本語学大辞典』朝倉書店
- 安部清哉(2017.3)『原』『篁物語』の作者・成立年と源順および河原院歌壇沈淪歌人群の長歌・和歌——九六一年から九八〇年頃か——』『学習院大学文学部研究年報』63

- 安部清哉 (2018.3) 『伊勢物語』三十九・四十・四十一段と源順——『篁物語』第Ⅰ部・第Ⅱ部共通の二典拠章段として——」学
習院大学人文科学研究所『人文』16
- 安部清哉 (2018.5) 「挿入段落・附載説話という視点から見た『篁物語』の構成と形成——残る断続場面の「ふみ(書≡漢字)」と
いう主題——」『学習院大学教職課程年報』4
- 安部清哉 (2018.6) 「係り助詞(ナム・ゾ・コン)の四文体別変遷史から見た『篁物語』——源順原作説とも照らしつつ——」『国
語と国文学』95—6
- 安部清哉 (2019.3) 「呼称から見た『篁物語』の段落構成——『せうと(兄)』と『男』の相補分布——」『人文』17(学習院大学
人文科学研究所)